

幼児の母



昭和十五年

五月

時局下の母

時局下の母には、常の母よりも二つの責任が附け加へられてゐます。

一つは、この時局下の非常生活の中で、しかも我子の成育に少しの支障もないやうに、一段の留意をしなければならぬことです。物が不足してゐます。量ばかりでなく、質も悪くならざるを得ません。人手も足りないし、自分としてもいろいろと忙しい。その中で、子どもは平時以上立派に成長させなければなりません。節約も國策線ですが、子どもを大切にすることも、一層大きな國策線です。この二つの一見併行してゐないやうな線の間

に處して、誤りない結果を擔ふてゐるのが、時局下の母の苦心です。

更にもう一つの重い責任、時局を貫く國家的の大精神を、我子に徹底させることです。それも説明や訓戒ばかりではなく、家庭の日常生活裡に、身を以て示してゆくことです。これがなくては、折角の時局下に我子を日本人に仕立て上げてゐるといへません。

それにしても此の二つとも、母自らの時局認識によつてのみ出來得ることです。

母のこよみ

土に親しめ

土のやわらかくなる時です。いろ／＼の苗の出る時です。外に出て大きい自然に接すると共に、わが家の庭でも土に親しめる時です。たとへ数坪の小さい花壇でも、小畑でも、それが地球のなまの土であることに變りはありません。

子どもといつしよに、耕しませうよ。蒔きませうよ。植ゑませうよ。培いませうよ。水をやりませうよ。

小さい農夫と園丁が、はだして土を踏むのを喜んでゐます。しつとりとした土の感觸は、子どもの心全體を自然に歸らせるものです。ましてや、そこからは、雙葉が出るのです。蔓がのびるのです。蕾がつくのです。花が咲くのです。それは子どもの心の培養に他なりません。